

青森県立高等学校魅力づくり検討会議（第3回）概要

日時：令和6年2月28日（水）

9：30～12：00

場所：ウェディングプラザアラスカ
3階 エメラルド

<出席者>

郡 千寿子 議長、高橋 英樹 副議長、石岡 由美子 委員、岩川 亘宏 委員、
大瀬 幸治 委員、葛西 崇 委員、葛西 孝之 委員、香取 真理 委員、
菊地 建一 委員、木村 信一 委員、中村 拓也 委員、中村 佐 委員、
花松 憲光 委員、前田 済 委員、村本 卓 委員、山本 隆悦 委員、
横岡 千和子 委員、吉川 康久 委員、米内山 裕 委員

1 開会

2 報告

(1) 学校視察について

事務局から、資料1により説明した。

学校視察に参加した委員から、次のような所感が述べられた。

- 東青地区と中南地区の高校5校を視察したが、自分が高校生だったときと比べ、高校のカリキュラムが大きく変わっていた。各校で重点を置いている教育活動等について学ぶことができたほか、生徒の様子を見ることができ、実りの多い視察であった。
- 各校ではカリキュラムを含め様々な面で工夫していることが分かった。また、各校ともに特長を生かした教育を実践していると感じた。

(2) 高等学校教育に関する意識調査について

事務局から、資料2により説明した。

3 意見交換

(1) 学校・学科の充実の方向性について（第1分科会報告）

第1分科会長である香取 真理 委員から、資料3により報告があった。

第1分科会副会長である葛西 崇 委員から、次のような補足があった。

- 第1分科会では、学校や学科等の魅力をどのように高めていくのかという視点で、現場の校長先生の御意見を伺いながら、幅広い分野の委員の皆様と調査検討を進め、今般、第1分科会委員の共通認識の下、学校・学科の充実の方向性をとりまとめたところ。ただ、現時点では様々な方向性が示されているため、今後、具体的な施策を展開していけるよう、更に議論を深め、全体を整理していく必要があると感じた。

委員から次のような意見があった。

- 学校・学科の充実に向けて必要となる視点や今後の方向性が、あらゆる角度から網羅的にまとめられており、本検討会議として共通認識を持つことができたのは成果だと感じている。

現場の教職員は、子どもたちの幸せのために尽力しているが、子どもたちのウェルビーイングの向上のためには、現場の教職員が元気に子どもたちと向き合い、生き生きと教育活動に打ち込むなど、教職員のウェルビーイングの向上が必要不可欠だと思う。子どもたちが学校に感じる幸せは様々あると思うが、「分かる授業」を受けることで学ぶ喜びや成長を実感できることだと考えており、そこに向けて全てが集約されていくものと思う。

資料3の2ページにもあるように、高等学校に求められることは、誰一人取り残さないきめ細かな教育の提供をはじめ様々あり、そのために教員も尽力しているが、現場は忙しくて大変な状況である。また、現場のマンパワーには限界があるため、ICTの効果的な活用や、保護者や外部人材などの地域との連携・協働により、現場のマンパワー不足を補い、地域全体で学校を支えているのが現状である。このような中、資料3では、支援体制の充実や環境整備について記載されており、こうした視点は非常に大事だと思うので、これらの実現に向けた具体的な方策等について、更に検討を進めていく必要がある。

また、学校視察では、委員の皆様から「今まで知らなかったことが多くあり、現場がすごく頑張っていることが分かった」といった感想をいただき、改めて情報発信の必要性を感じた。

- 各校では様々な取組をしており、実際に見に行かなければ分からないことが多くあると感じている。中学校3年生の自分の子どもや周りの子どもたちの話を聞いていると、進路選択をする際、各校の特色をきちんと理解した上で高校を選択している子どもはそこまで多くないのが現状であり、情報発信の方法をはじめ、様々な要因があるものと考えている。

普通科の高校であっても、各校で特色ある取組を行っているにもかかわらず、「普通科」という名称が、子どもたちには何も特色がないように聞こえてしまう。何に重点を置いているか分かるような名称にしたり、名称を変えずともコース名を明示したりすることで、子どもたちも各校の特色等を理解しやすくなると考える。

- 中学生や保護者は、こういう将来を描きたい（描いてほしい）から、将来こういう仕事に就きたい（就いてほしい）からといった理由で高校を選択するというより、自分や子どもの学力に合った高校を選択しがちである。特に、普通科は、何にでも潰しがきくという印象があり、中学校段階で将来の夢を持たず、この先どうなるか分からないという漠然とした不安を持っている場合、普通科を選択しがちであると思う。

学校視察に参加し、各校ともそれぞれの魅力があることが分かったが、子どもたちや保護者にその魅力がきちんと伝わっていないと感じた。普通科だからこそその魅力や、農業科であっても就農以外の進路もあるといったことなど、各校や各学科の情報を幅広く発信することができれば、中学生や保護者の選択肢は更に広がると考える。

- 資料3の4ページの一番下の○に「更なる魅力化・特色化だけでなく、今ある特色を子どもや保護者、中学校教員等に広く発信」とあるが、小学校段階から高校の魅力を発信することも大事だと思う。近隣の小学校の高学年の児童を対象に、ものづくり体験教室を実施している工業高校があるが、こうした取組が小学生にとって忘れられない体験になると思うので、中学校だけでなく、小学生や小学校教員に対しても高校の魅力を発信し、伝えていくことが必要。

- 地域との連携は非常に重要。各校が地域と連携している中で、高校と連携してくれる方のリストが欲しいなどといった声が聞こえてきており、そういった課題の解決に向けた方策も考えながら、地域との連携の更なる強化が必要であると考え。

先日、八戸市が水産業再興を目指して取り組む「八戸水産アカデミー」が開催され、八戸水産高校の生徒による青森丸での国際航海実習の成果発表会があったほか、会場と太平洋で実習中の青森丸を中継で繋ぎ、水揚げ作業の様子をリアルタイムで見学した。八戸水産高校では、航海実習中にICTを活用した学習を行っており、今後は、オンラインで授業を受けられないか検討しているとのことだった。

スペシャリストの育成に力を入れている八戸水産高校において、生徒の進路状況は多様化しており、他校においても同様の状況であると考えられるため、各校においては、どのような教育活動を行っているか、どのような資質・能力の育成を目指すかなどといったことを、総合的に情報発信することが大事。

- キーワードは「連携」だと感じた。これまでは1つの高校の中だけで教育が完結していたが、小学校から大学までの縦軸の連携や、地域や産業界等との横軸の連携により、各校・各学科の充実や更なる魅力づくりを図っていくといった方向性が見えてきたのではないかと。

議長から次のような発言があった。

- 検討会議としては、この報告を踏まえ、第2分科会における「生徒一人一人に充実した教育環境を提供するための学校配置について」の調査検討を進めていただきたい。
- また、今後は、第2分科会における検討がまとまり次第、各分科会の検討内容を踏まえ、検討会議において改めて全体を整理していきたい。

(2) 学校配置について（第2分科会での調査検討に当たって必要な視点）

事務局から、資料4～6により説明した。

委員から次のような意見があった。

- 「高等学校教育を受ける機会の確保」は、中学校の立場からすれば当然のことと思うが、一番難しい課題でもある。少子化が進む中、果たしてこのまま高校を維持できるのかといった問題は確かに出てくると思う。資料4の2ページにある「学校規模」に関する意見として、「生徒は人と関わる活動の中で成長していくもの」とあり、理解はできる一方で、コロナ禍において様々な教育活動が制限される中、ICTの活用は子どもたちの成長に繋がったという事例もある。郡部の学校や地域校の校長先生方からは、学校規模にかかわらず、高校を存続してもらわないと地域が衰退してしまうという意見も聞いている。

様々な意見がある中、何に重点を置いて人財育成を進めていくのかが大事な視点であると考え。 「高等学校教育を受ける機会の確保」は、都市部を除き全国的な課題であり、本県においては、1学級当たりの人数を減らすなどして高校を存続させたり、通信制課程のようにスクーリングをしながら地域から参加できるような高校を設置したりすることなどが考えられる。

- 意識調査の結果によると、「高校で身に付けたいこと」として、中学生や高校生では「人間関係形成力」が他の項目と比べ高い割合となっている。人口減少やICTの発達に伴い、生徒の質が大きく変わってきており、このことは、これからの教育において我々が考えていかなければならない課題であると考え。

学校規模の維持と小規模校の存続は、それぞれにメリットがあり、地域の要請もあるため、重要性等については一概には言えないが、小規模校の存続については、「充実した教育環境の整備」の観点は欠かせないものであると考え。

教育環境には、ICT環境を含む学校の施設・設備のほか、生徒同士の活動ができたり、学校行事をはじめとする特別活動等が充実したりしていることも含まれるものと考え。小規模校については、学校単体での行事等の特別活動の実施が難しい場合があるが、中学校や大学、地域との連携により実施が可能となるような教育環境の整備についても考えていく必要がある。また、心のケアを必要とする生徒への対応も教育環境に含まれるものと考え。本検討会議において、教育環境とは何かということを具体的に挙げ、委員間で共有することで、教育環境を整備していくという方向性の提示のみで終わらないようにする必要があると思う。

- 「高等学校教育を受ける機会の確保」については、全ての教育活動のベースであり、市部の大規模校や郡部の小規模校、個別の事情を抱えた生徒への対応ができる定時制・通信制課程の高校など、全ての生徒が希望する高校を選択できるような環境を整備することが必要であると考えます。

一方で、多様な選択科目の設定や、多様な部活動の選択肢の確保、学校行事をはじめとした特別活動等の充実、進路志望に応じた学習指導など、「充実した教育環境の整備」も、高等学校教育の質を確保する上では必要不可欠であると考えます。全国や世界で活躍できる人財を育成するためには、ある程度の学校規模の高校は必要であり、これからの時代に求められる力を育むためには、多くの人との関わりや部活動、学校行事が関係する部分も多いと思う。

先ほど事務局から意識調査の結果について説明があったが、西北地区においても、中学校の校長会で、現在の中学校3年生に対して意識調査を実施しており、「高校を選ぶ基準は何か」という問いに対し、「学校・学科・コースの特徴」が最も高い割合となり、次いで「部活動が充実している学校」、「学校行事が充実している学校」、「通学が便利な学校」と続いた。生徒はある程度の学校規模で、充実した教育活動が受けられる環境を求めていると感じた。

「高等学校教育を受ける機会の確保」を念頭に置きながら、「充実した教育環境の整備」に重点を置くような方向性が望ましいと考えているが、何よりも生徒の学びたいという思いに応える環境づくりや、生徒が求める学校や学校規模について考えていく必要がある。

- 学校配置について、現在6地区に分けて検討しているが、今後も6地区を基本に検討を進めていくということでしょうか。

→ (事務局) 地区割りをどうするのかということも含め、第2分科会で検討していただきたい。

- 資料4の「学校配置の方向性の検討に当たっての視点」に「限られた財政の中で」という文言が出てくるが、何か新たな取組を行おうとしても、このような表現があると、現状から何も変わらないと思う。また、資料3の4ページに「魅力づくりに向けた取組をより効果的に進めるためには、人的・予算的な対応も考慮する必要がある」とあるが、考慮するだけでは不十分で、むしろ「優先する必要がある」という表現にするなど、本検討会議として積極的な姿勢を示すことができないものか。教育に力を入れることにより、県全体の課題も解決していくことができると思うので、本検討会議において、人的・予算的な対応について更に強い提言ができればよいと考えている。

- 意識調査の結果によると、「高校の規模・配置に関する考え方」という項目において、「小規模化したとしても、できるだけ高校を残した方がよい」と回答した割合が、前回の令和元年調査と比較し、大きく増加しているが、この要因をどのように分析しているか。
→ (事務局) 要因についてははっきりとは分からないが、学校数が減少してきたことが影響していると思っている。
- 今後、第2分科会において、こうした意識調査の結果も踏まえながら検討していく必要があると思う。
高校卒業後に、大学進学や就職のために県外へ出ることが多いと思うが、また地元に戻ってきてもらえるよう、高校段階で地域のことを知る機会を増やし、地元産業や地域の魅力を理解してもらうことが大事だと考える。
小規模校を残していくことと、充実した教育環境の整備の2つの考え方が矛盾するといった課題はあるが、これまで以上に外部人材を積極的に活用することで、地域の魅力を知り、地域に貢献する人財が増えてくれればよいと思う。
- 以前、鱒ヶ沢高校に勤務していたが、PTAや同窓会など地域の方々との触れ合いや、地元の幼稚園や小学校との交流により、地域の人との繋がりが増え、生徒に郷土愛が醸成されているように感じた。小規模校に対して予算措置を講じ、充実した教育環境を整備することができるのであれば、小規模校を配置する方向で考えるのがよいと思う。
- 地域校は、地域の協力の下、様々な魅力ある取組を行っており、新聞にも多く取り上げられているが、地域校の募集停止の基準では、募集人員に対する入学者数の割合が2年間継続して2分の1未満となった場合には、募集停止等に向けて、当該高等学校の所在する市町村等と協議することになっており、そうなった場合、地域の喪失感は計り知れないと思う。小規模であっても、十分に魅力ある取組ができていることから、地域校の募集停止等の基準については、今後、検討する余地があると思う。
- 県が実施する通学支援等も大事だが、生徒の通学利便性という観点からは、自治体等と連携しながら、地域公共交通の利便性を向上させることも重要であると思う。
- 今後も人口の推移は変わっていくため、将来の魅力ある県立高等学校の在り方を考える上では、ハード面よりソフト面を充実させるべきであり、生徒数や学級数だけでなく、学校の充実という観点から、学校配置について検討すべきだと考える。

- 「充実した教育環境の整備」という観点で考えたときに、財政的な視点は欠かすことができないと思う。以前、農業高校に勤務していたとき、グローバル G. A. P の認証取得に向けて取り組んでいた生徒が地域に残り、自らが生産したメロンを海外に輸出するなど、学校での学びを自分の仕事に繋げられるような教育環境が整備されていたと思うが、学級数の減少に伴い、教員数が減少し、実習のための農場の維持が困難な状況になれば、生徒に充実した教育環境を提供することは難しくなってくると思う。本検討会議において、今後、財政的な支援をしっかりと行っていくべきだというような提言をしてもよいのではないか。
- 人口減少が進むとともに、立地条件や通学の不便さといった理由から、小規模校の入学者数が減少してきていると考える。小規模校の存続のためには、地元の子どもが入学するだけでは足りず、他の地域や県外から集まってくるような魅力のある地域、例えば、山が近くにあってスキーやスノーボードができたたり、海が近くにあって、様々なマリンスポーツや海に関する勉強ができたたりするような環境があることが大事。地元の方は、高校がなくなることで様々な影響を受けるとは思うが、小規模校の配置に当たっては、こうした環境があるのかを考慮しながら検討していければよいと思う。
- 地域校の中でも、鱒ヶ沢高校や三戸高校が報道等で多く取り上げられているが、小規模が存続していくためには、報道等を活用しながら、県民や県外に向けて、学校の魅力や取組について情報発信をし、周知していくことが必要だと考える。
- 教育環境について、委員間で共通認識を持つ必要があると思うので、次回第2分科会（第2回）において、関連する資料の提示や、理解が深まるような運営をしていただけるとありがたい。

議長から次のような発言があった。

- 第2分科会においては、本日の意見交換を踏まえて、「生徒一人一人に充実した教育環境を提供するための学校配置について」調査検討をお願いしたい。調査検討に当たっては、現場の校長先生の意見を伺うとともに、事務局から説明のあった意識調査の結果等も参考にしようをお願いしたい。
- 調査検討の結果については、第1分科会と同様、各地区部会の意見も伺った上で、次回の検討会議で報告してほしい。

青森県立高等学校魅力づくり検討会議と青森県教育改革有識者会議との関係性について、委員から次のような質問があった。

- 青森県教育施策の大綱及び教育施策全般にわたる専門的事項について、外部有識者の幅広い見地から助言等を得ることを目的に、青森県教育改革有識者会議が設置されているが、当会議と青森県立高等学校魅力づくり検討会議の役割分担はどうなるのか。

→（事務局）青森県教育改革有識者会議の最終提言で示された具体的な取組内容等は、意見募集等を通じて、整理されていくものと認識している。

我々としては、将来の魅力ある県立高等学校の在り方を考えていく必要があることから、本県高等学校教育に関する知識と経験のある委員の皆様を検討をお願いしているところ。最終提言の中には、青森県立高等学校魅力づくり検討会議で検討されている内容と共通する部分も多いが、本検討会議では、本県におけるこれまでの取組状況について検証しながら、将来の魅力ある県立高等学校の在り方を検討し、令和7年2月頃を目途に検討結果を取りまとめていただきたいと考えている。

- 両会議が連携を取りながら、本県の将来の教育について議論するのであれば非常に有意義だと思うが、両会議に上下関係があるとするならば、委員の皆様の貴重な時間を使うだけで、果たして意味があるのだろうかと思わざるを得ない。

教育はコストがかかるが、コストの話ばかりしていても、魅力ある高等学校にはならないと思う。学校同士の連携や、学校と地域の連携など、「連携」をキーワードに、固定観念を打ち破り、新しい枠組みの下で連携・協働していかないと、これからの青森県は厳しいと思う。

4 閉会

事務局から、本検討会議の地区部会の委員構成について、昨年12月に各地区で開催した地区部会でいただいた御意見を踏まえ、西北・上北・下北地区の3地区において、地区部会委員を各1名追加する方向で調整しており、委嘱が完了し次第、委員の皆様にご覧の会議資料等を通じてお知らせする旨、説明した。